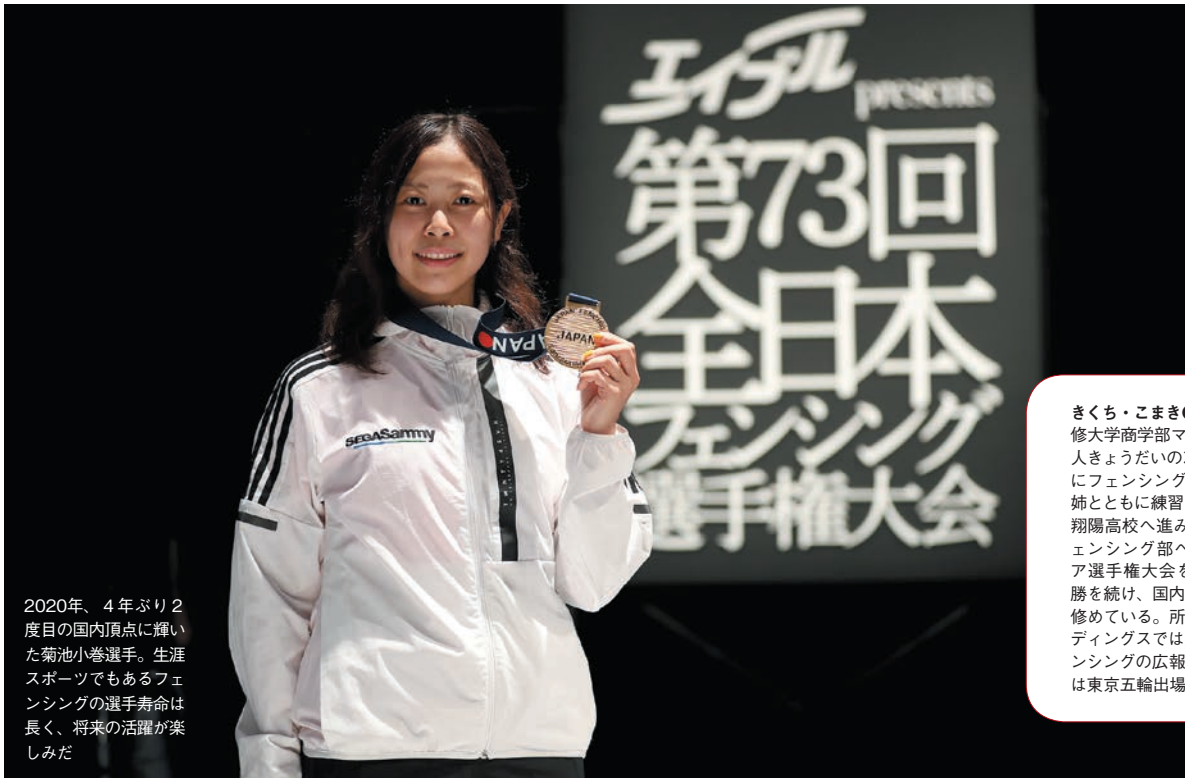


## “勝ちたい、超えたい” 思いが 自らを前進させる原動力

専修大学3年生のとき、菊池小巻さんはフェンシング女子フルーレで“世界ジュニア選手権大会”を制した。大学卒業後の2020年には全日本選手権で国内頂点を極め、大目標である東京五輪への選考会が目前に迫る。コロナ禍による不自由な練習環境の中にあっても、一筋に自分の到達点へと邁進を続ける情熱に秘められた思いとは。

セガサミーホールディングス株式会社  
総務人事本部ファシリティサービス部  
フェンシング 女子フルーレ選手

**菊池小巻さん**  
(平31・マーケティング)



2020年、4年ぶり2度目の国内頂点に輝いた菊池小巻選手。生涯スポーツでもあるフェンシングの選手寿命は長く、将来の活躍が楽しみだ

きくち・こまき●熊本県熊本市出身。専修大学商学部マーケティング学科卒。4人きょうだいの次女(3番目)。両親ともにフェンシング経験者で幼少期から兄・姉とともに練習に励む。同競技の名門校・翔陽高校へ進み、2015年に専修大学フェンシング部へ。16年のアジアジュニア選手権大会を皮切りに個人・団体優勝を続け、国内・海外で華々しい成績を修めている。所属するセガサミーホールディングスでは競技活動を中心に、フェンシングの広報活動も行う。目下の目標は東京五輪出場とメダル獲得。

**東**京五輪・パラリンピック競技大会開催を目前に控え、各競技の代表争いが続く中、フェンシングの女子フルーレ部門で出場を期待されているのが菊池小巻選手だ。果敢なアタックを持ち味に、専修大学在学中の2016年、アジアジュニア選手権大会(バーレーン)で個人・団体優勝、17年には世界ジュニア選手権大会(ブルガリア)で日本人女性初の個人優勝を果たし、同年間総合ジュニア世界ランキング1位に輝く。以降、着実に勝利を重ね、

20年全日本選手権大会においてライバルを下し、4年ぶり2度目の頂点に立ったトップアスリートである。五輪代表選考を目前に控えた21年2月、リモート取材にて、これまでの歩みと自身の目標について聞いた。

### フェンシング一家で育ち 世界舞台を志し専大へ

菊池さんがフェンシングを始めたのは4歳から。両親ともにフェンシング経験者で、父親は地元・熊本市のクラ

ブでコーチをしていた。7歳違いの兄、5歳違いの姉が同クラブに通っており、菊池さんも自然とフェンシングの道に。

当初は父から、「お兄ちゃん、お姉ちゃんにはできるのに、どうしてできないの?」と言われ、「くやしい! 負けたくない!」ときょうだいに立ち向かっていた。生来、負けん気の強い性分なのだ。特に兄は高校のインターハイで優勝するほどの実力者であり、子ども時代からめきめきと頭角を現し、クラブでも抜きん出る存在。菊池さんは



2018年に全日本学生選手権大会で、2年ぶり2回目の優勝を果たした(写真提供=菊池さん)

実力差、年齢差を感じながらも「勝ちたい！ 超えたい！」思い一筋にフェンシングを続けてきたという。

以降もフェンシングの奥深さに魅了され、それを軸に人生を歩んできた。中学を卒業すると、フェンシングの名門校・翔陽高校（大津町）へと進学。熊本市内から片道1時間半の距離も厭わず通学し技術を磨き、卒業後はフェンシングが盛んな関東圏の大学進学を目指すようになる。同校フェンシング部の女性コーチが専大出身であったことから進学を決意。当時の専大フェンシング部は、部員のうち3名が女子フルーレのナショナルチームに属し、世界を相手に活躍している選手がいたのも魅力だった。

「上京し専大へ進学したのはフェンシングのため、そして東京五輪を目指すためです。強いチームという憧れがあったので、私も専大フェンシング部で共に戦いたいな、と思いました」

大学入学までの主立った活躍として、高校2年生のときに高体連主催のインターハイで個人準優勝、3年生では国内ランキングによりジュニア日本代表に選出され、海外試合を経験。このことから、“世界と戦う”レベルとはどのようなものなのか？ 入部してその実力を知りたいという思いが強くなった。

「入学時は先輩方のレベルが高くて勝てませんでした（笑）。ですから身に付いたことは多く、実力ある先輩方との練習の成果で学生時代に全日本学生選手権大会、全日本選手権大会、世界ジュニア選手権大会で優勝することができたのだと思います」

以来、数々の優秀戦績を修める中で、特に自信を得た試合は冒頭でも触れた17年の世界ジュニア選手権だという。

「当時は大学3年生ながら、早生まれの20歳未満ということで、出場資格ぎりぎりまで臨んだ最後の世界ジュニア選手権。まだ若かったので、一試合ずつ絶対に勝ってやろう！ なにも考えずに思い切りやろう！ と挑みました。決勝までには一本勝負もいくつかあり、勝敗どちらに転んでもおかしくない状



張り詰めた緊張の静寂から、瞬速で剣が交わり、勝敗が決する。2020年の全日本選手権の決勝で優勝を決めた瞬間



全日本選手権を制し、共に歩んできたフランス人コーチ、フランク・ボアダン氏に思わず抱きつく場面も。同氏から、よりアグレッシブな戦いを学んだ

況でしたが、最後まで勝ち進めて。初めて世界タイトルを手にすることができた大会で、とても印象に残っています」

この勝利を契機にシニアクラス、団体戦でもナショナルチーム入りし、戦いの舞台は本格的に世界へと移る。同時に海外の選手からも日本の注目選手として研究される対象となり、国際的な存在感を発揮してきた。

### 積み重ねた練習は大きな“夢”のため

19年に専大卒業後はセガサミーホールディングスへ入社し、フェンシングの広報活動をしながら国内はもとより、海外試合で活躍。20年からは新型コロナウイルスの影響により練習時間、人数制限などが厳しく制限されるなか

で、五輪出場という大目標に向かって歩みを進めている。

「男女選手が交代で練習場を使っているため、実戦練習、コーチとの1対1の練習は1日3時間程度にとどまるので、通常時の6～7時間と比べると物足りなさがありますね。合間にフィジカル・トレーニングやランニングなどの自主トレを行っています」

本来であれば各国選手との試合を通じて、技術の課題を見だし改善していくのだが、国際大会の開催が中止されている現状においては、国内合宿によりカバーしている。「コーチとの練習で技を増やし、実戦形式で試すといった内容をしっかり行っています」と、不自由な状況下でも頼もしい。

菊池さんのフェンシングは、幼い頃に父から学んだプレースタイルがベースにあり、その上に国内外の実力選手と競い合う中で経験を積みながら、新たな技術を習得してきたものだ。加えて、16年に日本フェンシング協会がフランスから招聘したナショナルチームのヘッドコーチ、フランク・ボアダン氏に師事するようになってからは、海外強豪選手に伍する対策も練っている。

「外国人選手は身長もパワーもありますし、なによりもリーチの差による不利を試合の度に痛感してきました。対抗する戦い方は、フットワークをフルに使い、大きな選手の懐に入っていくことです。そのテクニックを磨いています」

たとえ時間や場所が不規則、かつ制限もあろうと、弛まらずに工夫し練習を積み重ねる日々が続く。

ルールが複雑で難しそうなイメージがあるフェンシングだが、菊池さんに魅力、見どころについて聞いてみると、「小さな子から年配の方まで幅広い世代が楽しめる、生涯スポーツだと思



ます」という。

フェンシングにはフルーレ・エペ・サーブルという3種類の競技があり、菊池さんが行っているフルーレは、ハイスピードで繰り出される剣技のなかに、守りと攻めの駆け引きがある。戦うほど奥深い妙味があるそうだ。

「剣を真つすぐ突くだけでは相手に避けられてしまうので、フェイントを使う、相手の攻撃からのカウンターサイドを狙うなど、頭脳を使うスポーツです。選手同士の技の読み合い、繊細な心理状況の変化も見どころだと思います」

### 家族や職場など周囲の応援を力に前へ進む

初心者が観戦するポイントは、まずはそのあふれるスピード感と、一瞬で決まる勝敗の行方だ。そこに着目してみることから始めるといいという。

「特に一本勝負は、静寂を切り裂くような選手の緊張する気合い、剣の当たる音、舞うような動きを見てほしいですね」

まさしく“心技体”を研ぎ澄ます華麗かつアグレッシブなスポーツといえる。だが意外にも、菊池さん自身はメンタルが弱く、ケガなどで精神的に落

ち込むこともあるという。そんなとき、どう克服し、気分を立て直しているのだろうか。

「経験者である姉のアドバイスや所属するセガサミー職員からのサポート、また高校時代のコーチとの交流といった応援が力になっています」

座右の銘は「勇往邁進」。“恐れず目標一筋に向かい進む”という意味があり、気弱な面を持つ自分を奮い立たせてくれる言葉だそうだ。フェンシングを教えてくれた父は残念ながら19年に他界したが、母やきょうだい、周囲の人々の激励を胸に、五輪の大舞台へと挑戦する。

「多くの方に日頃から応援していただき、とても励みになってありがたいと感じています。コロナ禍で不自由なこともあります。たとえピンチで辛い状況であっても、自分が目指す到達点だけは見失わないことが大切だと思うのです」

そうした思いを胸に、「五輪へ出場し金メダルを取る」という目標に向かう菊池さん。校友として東京五輪、その先へと続く活躍を見守っていきたい。

(2021年2月16日取材)